

# 患児の入院中と外泊時の活動量の検討

A Study of Pediatric Patients Activity While Admitted to The Hospital Compared to Activity Home.

東4階病棟：草深 仁子

信州大学医療技術短期大学部：阪口しげ子

## 〈要 旨〉

患児は入院することで、治療・処置などにより、身体の動きを制限される、あるいは長期の安静が指示されることが多い。しかし、実際に患児や健常児が1日にどれくらいの活動をしているのかについて報告されているものは少ない。今回当院の小児科に入院中の3歳から小学6年生までの患児における活動量を、1日の歩数について入院中と外出時に測定し、入院生活が患児にもたらす活動量の変化について検討した。

患児8名の3日間の平均歩数をみると、11歳女児1名を除き他は外泊時より入院中のほうが歩数が少なかった。奥原らの調査によると、健常時の4歳女児の1日の平均歩数は約2万歩であった。今回の調査では、活動制限されていない状態の安定した期間を選んで行ったにもかかわらず、4歳女児の入院中の歩数は2886歩であり、健常児の14%程度と非常に少なかった。

身体を動かすことは、子どもにとってあらゆる生活と発達の基礎であり、衝動や緊張のコントロールのメカニズムとしても重要な役割をもっている。そこで、私達看護婦の援助として、入院中の患児には室内あるいはその周囲の活動だけでなく、空間的に広がりを持たせた活動を支援していく必要がある。

## 〈キーワード〉

患児・活動量・生活援助

## I. はじめに

患児は健康が障害され入院することで、治療・処置などにより、身体の動きを制限される、あるいは長期の安静が指示されることが多い。身体を動かすことは、子どもにとってあらゆる生活と発達の基礎であり、衝動や緊張のコントロールのメカニズムとしても重要な役割をもっている。私達看護婦の援助として、入院中の患児には室内あるいはその周囲の活動だけでは、広がりを持たせた活動を考えることは重要と考える。しかし実際に患児がどれくらいの活動をしているのかについて報告されているものは少ない。現在病棟では、週1回「子どもの遊びと関わる時間」を保証する勤務体制をとっている。入院生活が長期療養中の患児の活動に与える影響を把握し、援助内容を検討するために、今回我々は、入院中の患児における入院中と外泊時の活動量を測定し、入院生活が患児にもたらす活動量の変化について検討した。

## II. 方 法

対象 1999年8月より東4階病棟に入院中の3歳から小学6年生までの患児8名

対象者の条件： 対象者は下記のすべての条件を満たすものとした。

- ① 入院前は活動の制限がない
- ② 明らかな発達障害がない
- ③ 全身状態が落ち着いている
- ④ 継続的な浸襲や痛みがない
- ⑤ 研究への協力に親子の同意が得られる

方法 Kenz のカロリーカウンター（セレクト2）を用い、入院中で活動制限されていない状態の安定した3日間と外泊時の3日間を測定した。活動量は歩数で測定した。

患児のうち1名は、退院となったため退院直後の3日間を外泊時と同様に考えた。

### Ⅲ. 結果

8事例の平均歩数を表1に、また入院中と外泊時3日間のそれぞれの歩数を図1に示した。

表1 事例の背景と平均歩数

事例	年齢	性別	平均歩数		平均歩数の差	平均歩数が減少した時期	測定時の特別な状況
			入院中	外泊中			
1	3	男児	9470	11644	2174	入院中	
2	4	女児	2866	14882	12016	入院中	検査があり静かにしていた
3	6	女児	10944	15256	4312	入院中	
4	9	女児	5240	5299	59	ほぼ変化がない	
5	10	男児	8567	11644	3077	入院中	
6	11	女児	2836	3684	840	入院中	
7	11	男児	3313	5765	2452	入院中	
8	11	女児	6816	1655	5161	外泊中	正月の外泊

8事例についてみると、入院中の平均歩数が外泊時より多いものは1例で、6例の患児は入院中の方が少なく、ほぼ変化がないのは1例だった。

入院中と外泊時の歩数差は最も少ないもので59歩、多いものは12016歩であった。その2事例を除いた6事例の平均は2152歩であった。

歩数差の大きかった事例2・8をみると、事例2は検査であったため、静かにしていた状態であった。また、事例の測定時は外泊した時が正月であり、ほとんど炬燵にはいって動かずにいた状態だった。

年齢・男女差については事例が少なかったため、検討しなかった。

### Ⅳ. 考察

患児8名の入院中と外泊時の3日間の平均歩数をみると、11歳女児1名を除き他は外泊時より入院中のほうが歩数が少なかった。奥原ら<sup>1)</sup>の調査によると、健常時の4歳女児の1日の平均歩数は約2万歩であるが、今回の調査では、活動制限されていない状態の安定した3日間を選んで行ったにもかかわらず、4歳女児の入院中の歩数は2866歩であり、健常児の14%程度と非常に少なかった。この歩数が少なくなる原因としては

1. 入院により病院内の建物の中だけに活動範囲が狭められたこと。
2. 同室の患児も治療中であり一緒に遊び回る仲間が少ない。
3. 治療中の筋力低下あるいは体力消耗により、通常の活動状態にすぐ戻れないなどが考えられる。

現在入院中の患児の活動範囲については、アスペルギルス等の感染対策のため建物の中だけに活動範囲が狭められている。しかし私達看護婦は入院中の活動量も外泊時と同様に多くなれるよう、院内学級への通学やプレイルームやスタッフステーションなどベッド周囲だけでない、空間的に広がりを持たせた活動が確保できるように援助していく必要がある。

一緒に遊び回る仲間がいないことについては、看護婦が「遊びと関わる時間」を利用し、集団遊びを行う中で、同室者だけでない病棟全体の仲間作りに努めたい。また当病棟では医療短大の学生ボランティアに入ってもらっているが、患児に対し大勢の人がかかわっていくことで活動量の増加につながっていくと考える。

体力消耗については、治療と筋力の低下についての援助は今後の検討課題と考えている。なお、事例8については外泊時の活動量の低下は正月時の外泊であった。冬は家での過ごし方として、炬燵を囲むことも多く活動量が少なくなることが予想され、活動量の測定にあたり季節的なものを考慮する必要があった。

身体を動かすことは、子どもにとってあらゆる生活と発達の基礎であり、衝動や緊張のコントロールのメカニズムとしても重要な役割をもっているために、私達看護婦が患児の遊びと関わることで、入院がもたらす患児の影響を少なくしていきたい。

## VI. 結 論

患児の入院中と外泊時の活動量について検討した。入院中の方が外泊時より活動量が少ない児が多かった。この入院中の活動量については、私達看護婦の遊びと関わる時間の利用や学生ボランティアの関わりで、一部解決が可能と考えられた。

## VII. 今後の課題

今後の課題として、事例を増やして検討を重ねるとともに、活動量が極端に少なくなってしまうと予測される簡易的無菌装置の安静が指示された患児の活動量と筋肉低下についての検討を行っていきたい。

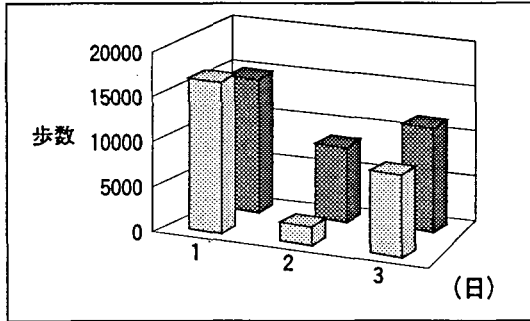
## 参考文献

- 1) 奥原香織, 久保田ちとせ: 病児における活動量の検討—健常児との比較—, 学生研究論文集96-103, 平成7年度.
- 2) 村田恵子, 高島孝之ら: 運動制限を受けた小児患者のストレス認知・コーピング行動と看護ケアとの関係, 神戸保健紀要 第13巻: 35-37, 1997.
- 3) 村田恵子: 治療上, 身体の動きを制限された学童の心理的ストレスと精神状態, 神戸保健紀要 第7巻: 47-53, 1991.
- 4) 西田和子, 中淑子ら: 5歳幼児の“活動や遊び”におけるエネルギー代謝の研究, 小児看護: 173-176, 1985.

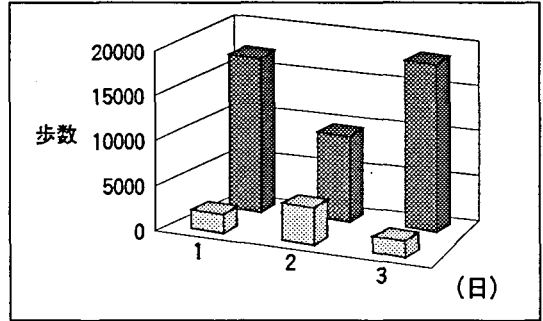
図1 患児の入院中と外泊時の1日の歩数



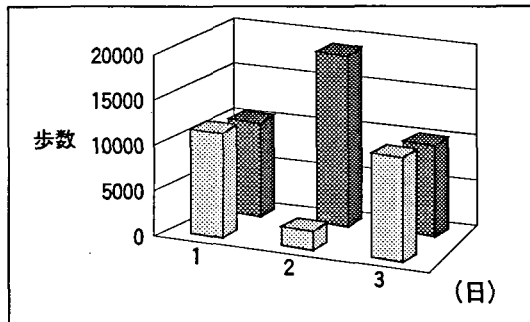
事例1 3歳 男児



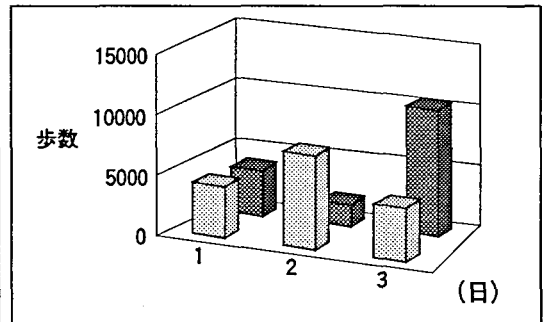
事例2 4歳 女児



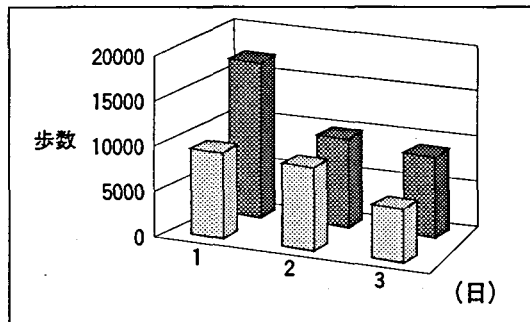
事例3 6歳 女児



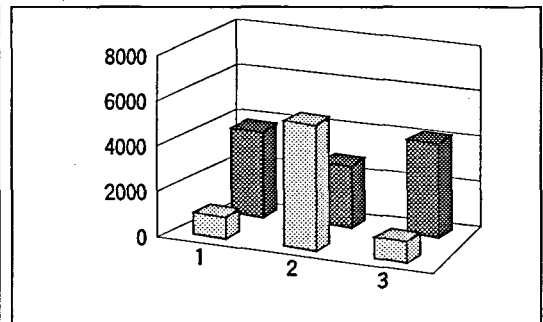
事例4 9歳 女児



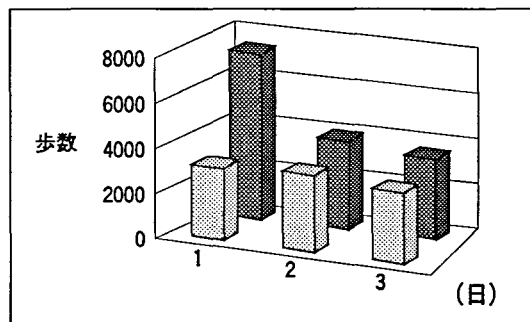
事例5 10歳 男児



事例6 11歳 女児



事例7 11歳 男児



事例8 11歳 女児

